

15. 都市型災害の被害者にならないための基本は何か？

都市型災害の被害者にならないための着眼点をまとめました。

■ 被害状況が直接見えない:ビルや建物の多い都市部では川や海の状態を直接確認することが難しく避難を遅らせる要因になります。だからといって災害時に、川・海に近づいてはダメです。被害者になる可能性があります。ラジオ・テレビの情報を活用しましょう。

■ 情報が限られる・遮断される:巨大地震では、広域の停電や通信障害が発生し、被災地へ情報が入ってきにくくなります。インフラ防災化が進んでも、情報の脆弱性はあると考えておくべきです。また都市部には防災無線が無いこともあります。

■ 避難途中のリスク:避難所に向かう途中に危険が潜んでいる場合があります。豪雨時は増水により橋が流されたり地震では落橋したりすることが考えられます。地震による液状化で道路が波打ったり陥没したり、車や車椅子等の避難はほぼ不可能となることが考えられます。さらに火災が発生した場合、避難ルートの確保は難しくなります。

■ 避難先のリスク:避難所の開設があっても避難者全員が入りきれない場合があります。代替対応として安全な避難ビル等を日頃から確認しておきましょう。

■ 群集に巻き込まれる二次災害リスク:歩道橋や狭い路地等ボトルネック状の場所では人が過密となり危険です。将棋倒しや群集雪崩が発生します。

■ 地下にいる場合のリスク・電車に乗っているときのリスク:地下は水没や酸欠のリスクが高く危険です。特に首都圏や関西圏では海面下に地下鉄や道路トンネルが無数に建設され、河川氾濫や高潮等により地下空間に大量の水が流入する可能性が考えられます。大雨や高潮が予測される時は地下空間を避けることが賢明です。また橋の上や地下鉄トンネルで地震に遭遇した場合電車から脱出できないリスクがあります。阪神淡路大震災では、鉄道車両が横転するくらいの大きな揺れがありました。

■ 自動車を運転しているときのリスク:アンダーパスの冠水が危険です。通行危険の表示板があることもありますが、大雨時の進入は避けましょう。また強風により橋上や駐車場等では車が横転したりします。さらに川沿いや海沿いの低地帯走行時に地震に遭遇した場合は、液状化でタイヤが埋まることや、造成地の盛土が崩壊することもあるので、運転中は減速・停車し、鍵を付けたまま車を降り、徒歩で安全な場所に避難しましょう。

■ 火災に巻き込まれるリスク:自分が注意していても火災は発生します。通電火災や津波発生時の油分への着火、東日本大震災時は石油タンク施設火災等、過去の地震でも火事は発生しています。冷静に判断し、風上や延焼しないような広場に避難しましょう。確実に初期消火活動を行えるよう耐震性の消火栓施設にしておくことが望まれます。

■ 心理的リスク:「正常性バイアス」という言葉があります。今回は大丈夫だろうとか、根拠のない安心感をもち、すぐに避難をしようとならない心理状態を指します。たとえば隣人が避難しない場合、自分も大丈夫という「正常性バイアス」が働きます。これにより地域を巻き込んだ大規模な被害が発生する可能性が考えられます。できる限り声かけを行い、避難が空振りになったとしても被害者にならないように避難行動を起こしましょう。

(K.M)